

平成 30(2018)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2019年3月8日	
氏名	高橋 郷	
所属団体(正式名称)	特定非営利活動法人 Little Bees International	
受入機関名(所在国)	amref health africa (ルワンダ共和国)	
研修期間	2019年3月1日～2019年3月9日	
研修テーマ	ルワンダでのアフリカ国際ワークショップ AHAIC2019 に参加し、アフリカでの UHC 実現のための知見とネットワークの強化を図り団体の活動及び TICAD7 (アフリカ開発会議) につなげる。	

1. 導入（研修前の問題意識）

人々の健康へのアクセスの権利を提唱する Universal Health Coverage (UHC)を達成するための機運は、SDG 時代を迎え非常に高まっている。実際、多くのアフリカの国々では、すでに UHC の達成を国内の保健戦略の中に組み込んでいる。しかしながら、2030 年の約束期間までに UHC が達成されるためにはまだまだ多くのことがなされなくてはならない。HIV/AIDs は、依然としてアフリカの成人の主要な死因となっているが、マラリアによる死因の 90%以上が、アフリカ大陸に集中している。生活習慣の改善により予防可能な疾患「非感染性疾患（NCD）」も蔓延している。統計上でも 1100 万人をこえるアフリカの人々は、自己負担による健康費用のため、極度の貧困状況に置かれているが、これは SDG の掲げる“誰も置き去りにされない社会”とは相反する状況になる。2019 年 8 月には、TICAD (アフリカ開発会議)7 が横浜で開催されるが、TICAD プロセスにおいても UHC の達成は極めて重要なアジェンダになる。AHAIC2019 に参加することで、現在のアフリカにおける最先端の good practice と知見を学び、関連する団体やユースとの連携を深めながら、団体におけるヘルス活動の拡充と TICAD7 での公式サイドイベントの開催とアドボカシーにつなげていくことが、今回の研修の主目的であった。

NGO で活動する中で、その存在の脆弱さが持続可能なインパクト活動を現地で展開するためにも、課題として常に頭の中にあった。第 4 次産業革命を迎えた高次元の情報化社会において SNS 等を通じた広報によるイメージ戦略、現場で起きていることの情報の共有も、市民社会セクターが“存在感”を高めていくために大切ではあるが、個々の団体を超えて NGO 業界全体の成長と発展をうながす“ブランド化”戦略が、いまこそ必要なのではないだろうか。そのためには、セクターや国境といった既存の壁を越えた連帯、“つながり”の強化こそが必要であり、グローバルアクターたちと層の厚いコミュニケーションとネットワーク化の促進により、NGO 活動がうねりとなって、グローバル社会により大きなインパクトを巻き起こしていけるのではないかと、今回の AHAIC2019 への参加を通じて期待している。実際に現場も含め、グローバルに活動する中で、その波が押し寄せていることも実感している。グローバルな連帯運動、これこそが日本の NGO の存在強化かつキャパシティービルディングにも直結する確かなソリューションではないだろうか。

2. 本文（研修実施内容）

国連の UHC 協議会において重要なポジションを占めるビルゲイツ・メリンダ財団のパートナー団体でもある NGO Amref Health Africa とルワンダ共和国が共催で開催した国際会議 Africa Health Agenda (AHAIC) 2019 の、ユースセッション（2 日間）と本会合（3 日間）に参加した。AHAIC は、マルチセクターアプローチの手法に基づき 2 年に一度、アフリカにおける UHC の課題と進捗状況をショーケースとしてグローバル社会と共有するために開催されているが、3 回目となった今回は、ルワンダ共和国の首都キガリに、アフリカを中心に世界中 47 か国から 1500 人以上のグローバルアクターが参加している。今回の研修 AHA の主要な目的は 3 つある。1 つには、アフリカにおける主要な健康課題への理解を深

めること。AHA は、教育や経済、気候変動の課題と関係づけながら、議論するための場を設けている。2つ目は、特にアフリカにおける異なるセクター間（政府、民間、市民社会、アカデミア等）におけるリーダーたちとのネットワークと協力につながる機会を見出すこと。3つ目は、アフリカにおける UHC を前進させるために、政策決定者や様々なドナー間をつなぎ、影響させ、変化を起こすためのコミュニケーションの場であること。今回の AHA2019 のテーマは、“アクセス” “クオリティ” “ファイナンス” “と” アカウンタビリティ “の 4 つをキーワードにしなが、アフリカにおける UHC を達成するためのマルチセクターアクションであった。

AHAIC 2019 は、アフリカにおける最近の医療科学の発展の評価や、教訓そして、具体的な実証データへのアクセスを可能とする場でもある。限られた現場だけでは見えてこない、ヘルス分野におけるアフリカの “今” の状況とそれに対するソリューションを世界から集まった専門家の方たちとの対話、ネットワークを通じて学んだ。

例えば、AHA の枠組みの中では、初めての開催となった “栄養に関するシンポジウム” は、政策決定者、研究者、市民社会、民間セクターと多彩な顔触れがそろい、ユニークなものとなった。栄養の要素を開発計画や UHC に関わる予算案に組み込んでいくことの重要性が議論された。

またサハラ以南のアフリカにおいては乳幼児の死亡率が極めて高く 38% となっているが、その対策として妊婦に対するプライマリヘルスケアシステムの拡充が必要であることが、政策決定者、市民社会、現場の CHW から再三声があげられた。

ワークショップの中でも非常に効果的だと思えた新しいメソッドがあった。

“Diagnose Audience” というもので、ターゲットの現在の意識に変化を起こすための道筋を “Awareness”、“Will”そして “Action” の 3 つの段階で分析。最終的に政策決定者にまで変化の影響を及ぼすためのロードマップを見える化させるための作業になる。

“Diagnose” に基づいて、実際のアドボカシーキャンペーンで使用できるキャッチコピーの作成についてもグループワークを行った。「3 つのセンテンス・2 つの主要テーマ・27 文字以内」これが効果的なコツであるとの指導のもと、実際に作成の演習を行った。研修者のグループでは、市民社会のユース、アフリカユニオン(AU)の行政官、米国大学の研究者等多彩なメンバーにより構成されたが、未成年者の薬物使用を食い止めるための標語の作成を行った。

別のセッションでは、UHC に取り組む市民社会のアドボカシー戦略の立て方について演習を行った。アドボカシー戦略において、団体で重視するのはどの部分か—財政、社会から取り残された人々、ヘルスワーカーを含めた人的リソースの強化、社会的アカウンタビリティを確認するためのプロセスに市民社会を加えること等、参加者間で活発な議論が交わされた。アドボカシー大切なことは成果として求めることをどう実際に具体化していくのかということ。取り組んでいる地域の保健政策に不足している部分を、情報収集から分

析し明確化し、社会や政策決定者に訴えかけていく。それも単独団体だけではなく、国際的な保健分野の改善に取り組むネットワークの一員として行うことが大切。アフリカの有名な金言「もし急いで行きたいなら、一人で行きなさい。しかし、もしあなたが遠くへ行きたいなら、一緒に行きなさい。」これもまたアドボカシー活動の本質をついたものであろう。

本会合初日には、TICAD6のナイロビ宣言の枠組みの下でのコミュニティヘルスワーカーの役割と責任の重要性について、アフリカ各国保健省の代表そして民間団体の代表から提言もなされた。今回のAHAには、開催国のルワンダを始め複数のアフリカ諸国の保健大臣も招待されていたが、これもまた広く議論の場を開放するAHAならではの光景だったろう。閉会式においても、キガリ市長から、今回のこのアフリカ・ヘルスアジェンダ2019の成果をUHCの達成のために活かすとともに、併せて8月のTICADサミットの場においてもアフリカのトップの方たちが、UHCの達成のための予算スキームについてさらに議論を進めていってくれるだろう、という期待を込めたコメントもあった。

3. 考察・提言

3-1. 結論

クロスセクター間の協力こそが2030年までに掲げたUHCの達成のための要となることの再確認がなされた。SDGsの目標でも謳っているように、異なるセクター間のパートナーシップは、行動のサステナビリティのためにも必要不可欠である。政府や市民社会、民間セクターといった多彩なアクターたちの行動やパートナーシップにアフリカにおけるUHCの進展はかかっている。研修会議やワークショップへの参加を通じて、2030年までの目標であるUHCに関わる行動にコミットメントするための道筋を理解することができたことは大きい。今回の研修はまた、2019年の8月に日本政府がイニシアティブをとるTICADにおいて、また9月に国連本部で開催されるUHCに関わるハイレベルミーティングに向けての良き指標となっている。

5日間のセッションを通じて、UHC達成のために障害となるアフリカが抱える課題が見える可され、また、新しい知見や調査結果、政治的関与がこの課題を克服するのにどう役割を果たすのかが議論された。

会議場に設定されたオープンなマーケットプレスで展示された、様々なデータ、知見は、参加者がよりUHCに向けた取り組みにコミットすることを可能とする、一種の見本市のような役割を果たしていた。先進的な技術革新の芽が確実にアフリカ大陸にも芽吹ききていることも実感できた。

3-2. 本研修成果の自団体、NGOセクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

ある研究発表セッションでは、amrefのリサーチャーによりケニアの15歳から49歳の女性たちの45%が性的暴力の被害を経験していることが明らかにされた。伝統的かつ文化

的にも男性優位の社会構成となっているケニアにおいて、この対処法としては、コミュニティのゲートキーパーとなる人々の性的暴力に関する知識を向上させること、また被害者の女性たちに適切な心のケアを行うことが重要であることが確認された。知識については、医学的なものだけではなく、性暴力に対処するための法的な枠組みも学ぶことも大切であることが会場で指摘されている。参加者からの発言で、インフォーマルセクターの多くの被害者女性たちは、法的知識に欠けていること、また文化的な穢れの対象になることを嫌い、事例について警察をはじめとする外部の治安機関に報告されていないことも現場の事実として参加者間で共有された。研修者もケニアのスラム地区で活動するものとして同様の趣旨を発言した。被害者が例えば法廷に事件について訴えたとしても、“Girls Justice”がケニアにおいて遵守されているかどうかエビデンスがないことが、市民社会からも指摘されている。参加していたケニアの保健省の職員が発言につまる場面も見られた。

研修者は、これまで対処療法的に、心のケアのカウンセリングを団体が運営する学校の校長先生を中心に被害者女性に対して行ってきたが、性暴力被害が多発する活動地域のスラムコミュニティにおいて犠牲者をゼロにしていくためには、これまで団体が力を入れてこなかった司法の視点から、法的措置に訴えることも含め、“Girls Justice”がコミュニティの中で、担保されているかどうかを人権団体と協働で検証することの必要性を実感した。

他の事例としては、コミュニティにおける適切なヘルスサービスへのアクセスの向上の確保、そしてプライマリーヘルス・ケアシステムの構築についての発表も非常に興味深かった。ケニア山大学、ケニヤッタ大学、保健省の合同調査により、コミュニティにおける保健活動の根幹を担っている **Community Health Worker (CHW)** のモチベーションについて非常に興味深いデータも示されている。

以前から指摘されていることだが、**CHW** として活動するためのトレーニングプログラムを実施していても、長期間にわたって実際に活動に従事する **CHW** の数は多くはない。調査では、ケニアのキブウェゼィ地域の **282** 人の **CHW** を対象に行われた。

調査によると、**CHW** の大多数は、その活動の重要性について認識し、役割にとっても満足していた。継続的なトレーニングに参加することにより、**CEW** の活動からドロップアウトする率もさがっている。

一方で、活動への対価の支払いも **CHW** 活動のモチベーションと大きく関係していることが明らかにされた。**55.8%** の **CHW** が活動の対価の支払いは重要と答えている。実際に現場で、対価を受け取っている **CHW** の **66%** が辞めることを考えているのに対し、対価のない、無報酬で活動する **CHW** の実に **80%** がドロップアウトすることを考えている。無報酬 **CHW** のドロップアウト率が **43%** に対し、対価を受け取っている **CHW** ではドロップアウト率は **13%** であった。

結論としては、**CHW** の継続的な活動のためには、定期的なトレーニングの実施、仕事量の公平性の確保、各家庭訪問のための交通費の支給に、一定のレベルの支払いが必要であることが明らかにされている。

研修者は、団体の活動実態を振り返り、現在 CHW は、女性グループのボランティアグループ（登録者 43 名）を中心に行っていること、そして彼女たちは無償のボランティアであるため、活動量（業務量）については、それぞれの判断に任せており著しい偏りがみられること、定期的なトレーニングプログラムがないため、一度ドロップアウトした CHW が期間を空けて復帰することが非常に難しい環境にあることを理解した。今後のコミュニティにおけるプライマリー・ヘルスケアシステムの改善のためには、ボランティアグループのモチベーションを維持するための適切な支払いの実施、業務の適切な分担と受け持ち地区の公平な割り当て、CHW として活動を継続するための定期的なトレーニングプログラムの実施が必要であることを理解した。

研修の開催期間中、多様な参加者が非常に力強いコメントを多くしていることも研修者の目を引いた。やはり保健の課題は、個々人の生活の質と密接に関係しているために、一つ一つの発言・コメントにも重みが出てくる。スイスの研究機関のある研究者は、そうした状況を「人権意識がアフリカに根付いた証」と評していた。援助の現場では、**Right-based Approach** は、もちろん遵守されなくてはならないことだが、**UHC** という人類社会に共通する非常に大きなアジェンダにおいても、草の根で活動する人々の声というのは、大きな意味を持つことも再認識させられた。アフリカという土壌で育まれたアフリカの声、というものをコミュニティだけにはとどまらずに、地域や国際的な保健を巡る議論の中で、もっと積極的に活用し、発言していくことが大切である。

また本会議に先立って、2 日間のユースによるワークショップにも参加しているが、全人口の 60% が 25 歳以下という、アフリカの希望を象徴するような生气と活力に満ちたユースたちのパフォーマンスと発話には終始圧倒された。

中でも自身の体験から **FGM** の根絶を訴える若い女性活動家の発言に、会場中が立ち上がり、大きな賞賛を与えていたことは、問題の緊喫性の実感と共に、研修期間中の記憶に残る一ページであった。

研修者の団体では、国際協力を推進する特定のイベントでの機会を中心にユースのマンパワーを活用していたが、これを機に、現地における活動においてもユースの持つ熱意と力を活用し、グローバルネットワークでの行動と、現場での持続可能なコミュニティの形成につなげていきたい。

3-3. テーマに関する日本の国際協力分野への提言

保健の世界は今、感染症から非感染性疾患(NCD)への取組重視へと大きくシフトチェンジしようとしている。アフリカの低・中所得国の多いアフリカでは、**NCD** への取組は感染症への取組と併せ二重の負担を意味し、特に脆弱な環境に暮らす人々には更なる負の影響が広がる懸念される。健康はすべての社会生活の基盤となる要素であることをすべての人々が理解し、**NCD** への対策として投資や人的・物質的リソースの提供を増やすことで対応することが必要不可欠だ。特に市民社会セクターは、パートナーシップこそが持続可能な活動のためのキーであることをよく意識し、積極的に **UHC** の達成のために様々な分

野・環境で貢献しながら、国連 UHC 部会の議長団体としてもコミットしている NGO amref のようなグローバルヘルス・ネットワークの活動に横の連帯を深め参加していくべきである。

4. 団体としての今後の取り組み方針

2年に一度しか開催されない **AHAIC 2019** への参加を通じて、アフリカにおける UHC の達成状況とそれに向けた課題やソリューションの実例について、関係者や関心のある方を対象に無料で報告会を開催し、UHC に関わる日本の市民社会全体の知見の共有と強化につなげていきたい。

団体の活動地ケニアにおいては、2019年度に計画しているヘルスプロジェクトに **AHAIC2019** への参加で得た知識を反映させるとともに、ネットワーク化により様々なリソースを活用することで、活動のスケールアップと裨益効果の増進を図っていく。

日本政府がイニシアティブをとる、TICAD（アフリカ開発会議）プロセスにおいても UHC の達成は、最重要課題の一つとされているが、実際、2018年10月に東京で開催された TICAD 閣僚会議においても UHC に関わる分科会が設定され、特に UHC の財源を巡る枠組みの拡充について多くの有識者により活発な意見交換がなされた。LBI は、2016年にアフリカで初開催となった TICAD6 において、JICA やアフリカ市民ネットワーク for TICAD との協働で、アフリカコミュニティの脆弱さを議論する公式サイドイベントを国連やケニア政府、赤十字や NGO をパネリストに迎え主催しているが、TICAD7 では、アフリカの UHC の達成に関わるアジェンダで TICAD7 サイドイベントを開催し、多くの関係者の方たちを巻き込みながら、ダイナミックな議論の構築に資していきたい。

<CEWとの対話セッション>



<WHO CHW ガイドラインセッション>



<セッション風景>



<マーケットプレイス>



<ユースセッションにて>



<ワークショップ>



<研修ホストのルワンダ保健大臣と>



<研修会場にて>

